

遊佐昇著 『唐代社會と道教』

池 平 紀 子

本書は、著者が二〇一二年に東洋大學より博士（文學）の學位を授與された論文に加筆訂正を施して出版されたものである。時代は隋唐五代、地域は敦煌と蜀の地域における道教を中心的對象とした研究であり、著者のスタンスとして、まずこの時代のこの地域に生きた人々の信仰や宗教活動に目を向け、次にそれらが道教經典と如何に關連するかを考えると、この方法が採られている。全體は次のような三部構成となっている。

第一部 敦煌と道教

第二部 蜀地（四川省）と道教

第三部 成都と道教

以下、各部毎に内容を概観しつつコメントを加えていきたい。

まず第一部「敦煌と道教」では、佛教都市として有名な敦煌は、しかし道教もまた他の地域に劣らず信仰されていた土地であることを指摘し、その活動の實態について迫る。

第一章では、敦煌地域の道教の特徴、敦煌道教文獻の

概要、當地における佛教と道教との関連などについて述べられている。

第二章では、鎮宅の神への願文である敦煌文書S六〇九四を分析し、これが庚申の日に書かれている点などから、鎮宅靈符は北斗信仰・玄武神信仰を媒介として庚申信仰と結びついていたのではないかと推定し、「鎮宅神信仰は庚申信仰の一つのバリエーションに近い形で唐五代の民間に広がっていたのではないだろうか」(三四頁)と結論づけている。これは庚申信仰研究についての新たな方向性が示されたものとして注目に値するものである。第三章から第六章では、敦煌文書の道教文献が取り上げられ、俗講との關わりについても論じられている。敦煌文書の道教文献は佛教文献に比して数は少ないが、民間における道教信仰を知る上で貴重な史料であり、また研究の少ない道教の俗講についての報告として本章は重要である。

第三章ではS二二〇四文書の「董永變文」を取り上げ、數ある董永故事の中で、この董永變文において初めて、

董永と天女との間に生まれた「董仲(舒)」が登場するのは、蜀の地における董仲(舒)信仰に由来するのではないかと指摘している。

次に第四章ではS六八三六文書の「葉淨能詩」を取り上げ、これが『道藏』本「唐葉真人傳」や『太平廣記』本「葉法善」の原本となる佚文「葉法善傳二卷」から唐末五代の頃に成立したものであることを論證し、「葉淨能なる人物は葉法善の事跡をかりて産み出された人物である」(六六頁)と考察している。興味深いのは、道教色の強い「語り物」である「葉淨能詩」において正一派から出た葉法善の傳がベースとして用いられたのは、これを作製したのが天師道教團に屬する者であったからだとする指摘で、上清派が隆盛であった唐代においても民間では天師道系の教團が根強い信仰を得ていたとして、唐代道教の信仰の様相が多層的に示されている。

第五章では北京國家圖書館藏BD二一九文書を取り上げ、この文書を繙刻し校録を作成した上で、これが道教の俗講において、特に「受戒」と「布施」を勧める意

圖を持って講じられたものであることを明らかにしている。更に「變文」や「講經文」といった敦煌文獻の分類について研究者間に存在する用語上の不統一について整理し、著者はこの文書については「唱導文」と題するところが適當ではないかと提唱している。この點は今後も敦煌學研究者が思想・文學・書誌學等各分野の垣根を越えて検討してゆくべき課題であろう。また、本章は當該文書の形式上の検討が主目的となつているため、本文に載る四種の説話については詳しい説明がなされていないが、これらはどれも幽冥譚を中心とした道教説話として非常に興味深いものであり、その内容の分析についても今後の研究が待たれるところである。

第六章では、BD七六二〇文書を手がかりに、道教の俗講の場における講の構成について論じられている。それは例えば、まず「音聲伎樂」で人を集め、説法の效用を聞かせて聴衆を喜ばせ、更に催しで客寄せをした上で、道教經典の法要を説き聞かせるといったプロセスであり、舊來は説法を中心としたシンプルな構成であつた講が、

時代の経過や開催場所の廣がりとともに、娯樂的な要素を附け加えていった軌跡を明らかにしている。

第二部「蜀地（四川省）と道教」では、蜀の土地において土着的に生まれた信仰が、中央で流行している道教の影響などを受けながら變化していく過程が追跡されている。

第一章と第二章では、成都平原の北のはずれに位置する「寶圖山とうせんざん」と、この山で昇仙したとされる「寶子明」という人物への信仰が取り上げられている。山頂に巨大な二本の石柱が直立する寶圖山は、その奇觀から古來崇拜の對象とされ、複数の異能者の傳説が伝えられていたという。中でもこの山の名稱の由來ともなつた寶子明については、杜光庭の『錄異記』にシンプルな記事が見え、明代になると急激に多くの新しい要素が附け加えられていくが、著者はそもそも多くの敦煌文獻に残る「昇玄内教經」に出る仙人寶子明がこの蜀の山と結びつけられた理由のひとつとして、當地が唐室李氏ゆかりの地とし

て中央とのつながりを強く意識した土地であった點を擧げている。

第三章は、杜光庭『道教靈驗記』に見える、蜀の地域における救苦天尊信仰に關する話より説き起し、地獄救濟者としての救苦天尊信仰について、唐末頃における十王信仰の廣がりとの關連を指摘するとともに、十三世紀頃の成立とされる「地府十王拔度儀」などを引用しながら、それが十天尊・十眞君などとも習合していく様子を追跡している。本章は佛教と道教の地獄説の習合を考える上でも非常に重要な一章である。ただ、本章の原載誌は一九八九年の本誌第七三號であり、本書「あとがき」によれば今回の出版では全面的な書き直しは行っていないとのことであるのでやむを得ないところではあるが、その後の小南一郎・蕭登福・田中文雄各氏らによる十王信仰に關する研究成果を踏まえての著者の新たな見解についても知りたいところであった。

第四章では、韓愈や李翱などの詩中にも名を留め唐代にはよく知られていたと思われる四川南充の女性道士謝

自然について、甲乙二系統の傳から彼女の道教についての考察がなされている。そして結論として、甲傳の方が史實に即したものであり、司馬承禎より傳授を受けたとする乙傳については、葉法善がそうであったように、「謝自然を信奉していたグループが、後に謝自然ひいては自分たちのグループは司馬承禎を通して上清派の流れを汲むものであることを證明せんとして、新たに作り出した傳である」(三二八頁)としている。

第五章では、やはり四川で活躍し唐一代を通じて名を知られた道士であった羅公遠が取り上げられている。術士的要素を持った羅公遠は、信賴すべき傳があまりない代わりに様々な靈驗譚に彩られた説話資料が豊富に残されており、著者はそれら説話資料の分類と分析を通して、蜀の地における人々の道教信仰を浮かび上がらせている。特に羅公遠が示す靈驗の對象が、まずは召龍致雨から始まり、次いで様々な願いに擴大されていく點は、干害が深刻であった當地との關連性が指摘されており興味深い。第六章では、著者が一九八六年に青羊宮より贈與され

た二仙庵舊藏の版本「元始天尊說川主感應妙經」について検討し、四川の地方神ともいえる川主神と社會との關わりについて論じている。著者は、四川で信仰されてきた複数の川主神のうち、道教神たる「川主」として本經が信仰の對象としたのは趙昱であり、その根據として道士李珣りきんに従事していたことを記す『龍城錄』の趙昱傳を擧げている。また著者は民國六年（一九一七）に二仙庵で重刊された本經が重刊される前の原經典も含め、重刊本『道藏輯要』にも原『道藏輯要』にも収録されていないことを指摘しているが、これは、二仙庵には輯要には収録されなかったが版木に彫られている經典や輯要刊行後に新たに彫られた經典が複数あることが確認されており、本經もそのうちのひとつであろう。ただ『道藏輯要』の編者については、丁培仁氏の指摘、および本誌九八號の森由利亞氏の詳細な研究により、彭定求ではなく蔣予蒲であることが明らかにされ定説となっている點を改めて確認しておきたい。

第七章では、『道教靈驗記』卷八「昭成觀天師驗」に

ある、天師像を描寫した「縫絳綵爲五臟腸胃喉嚨十二結十二環、與舌本相應」という記述から、唐の頃に道教で人體模型のような夾紵像が作られていたことを指摘し、當時の道教者の身體觀と參拜者への信仰教育について考察している。

第三部「成都と道教」では、四川省の他の廣い農村地域とは異なる都市としての成都に注目し、その道教信仰について論じている。

第一章では『道教靈驗記』に記載される成都市に存在していた玉局觀について、他の文獻とも照合しつつ、その場所や宮觀・神像、および信仰について検討されている。傳説では成都の玉局化という地は青城第五洞天と繋がっていると考えられ、玉局觀はそこに築かれたとされる。位置は街の南側、川（現在の錦江）の側で、著者は特に韋臯いごう（七四五―八〇五）が都市開發を進めて以降、川の周圍に居住した人々の信仰を集めていったのではないかと推定している。

第二章から第四章までは、嚴君平に對する信仰とその宮觀である嚴眞觀についての考證がなされている。『漢書』その他の傳によれば、嚴遵（字君平）は成都で卜筮をし、日に百錢を得れば店を閉めて老子を講述し、楊雄はじめ朝廷在位の賢者がこぞってその徳を稱したが生涯官に仕えず、九十で世を去つたとされる。この嚴君平は古來蜀の人々に愛され多くの傳説に彩られた人物で、その後は道教においても仙人の一人として取り込まれていく。著者は種々の文獻資料から、成都の嚴君平舊宅跡に建つていたとされる嚴眞觀の位置を現在の西勝街附近と推定し、また説話に基づく各地の遺跡の存在や、「評書」等語り物の普及からその信仰の廣がりについて検討している。南宋の『夷堅志』には福建省福州に嚴君平が現れたとする説話があるとのことであり、その傳播の廣さは注目に値する。

本書は東洋大學において金岡照光氏のもとで敦煌文學文獻を學ばれ、大正大學博士課程において吉岡義豐氏の

もとで敦煌學と道教學を併せ學ばれた著者が八〇年代から二〇〇〇年代までに書かれた論文の集大成であり、評者を含め敦煌學・道教學を研究する者はすでにその成果から多くの知識を享受してきている。とりわけ今後も參考にすべきは、その土地の地理氣候、政治經濟といった諸要素から人々の生活の有り様を十分に考慮した上で宗教・信仰を捉える姿勢であろう。本書タイトル『唐代社會と道教』の「社會」に込められたメッセージを眞摯に受けとめたい。

(A5判、五〇四頁、東方書店、二〇一五年三月、五五〇〇圓(税込))

註

- (1) 遊佐昇「唐代に見られる救苦天尊信仰について」(『東方正教』第七三號、一九八九)。
- (2) 王志遠主編『道教百問』所收、丁培仁「典籍篇」第九七問(今日出版社、一九九六)。森由利亞「道藏輯要」と蔣予蒲の呂祖扶乩信仰」(『東方正教』第九八號、二〇〇一)。